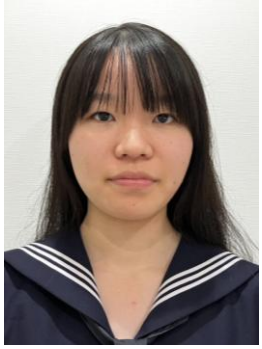
令和７年度中学生・高校生の国際理解・国際交流論文



高等学校の部　最優秀賞

「外国人」ではなく、一人の人として

福島県立原町高等学校

２年　尾島　望花

「ずっと日本で働きたいです」

これは、とある技能実習生の男性の言葉である。彼とは、私が日本語教師ボランティアをしている市の多文化共生センターで知り合った。日本語学習に対したいへん意欲的で、国家資格か日本語能力試験の一級を取れば永住権を申請したり、在留期間を伸ばしたりできるから頑張ると話していたのがすごく印象的だった。

また、その時に一緒にいたベトナムから来た技能実習生の男性は、来日してからの期間がまだ短く、会話こそ拙かったが、日本の生活に興味があり、学校生活や季節の行事についてたくさん質問してくれた。日本人と流暢に会話をし、教科書やネットでは見ることのできない日常生活について知りたいと話していた。

この会話をした直後に参議院選挙が始まり、日本人を第一に考えた国づくりをしていこう、という話題を聞くことが増えた。誰もが一度は聞いた覚えがあると思う。私はこの話を耳にしたとき、この「日本人」とはどこまでの人を指すのだろう、と疑問を覚えた。それと同時に、技能実習生のこれからについて大きな不安も感じた。

日本に住んでいる外国人には、様々な背景を持っている人がいる。日本人と結婚した人や永住権を取得した人、どちらでもないが何年も日本で暮らし、完全に日本社会に適応している人もいると思う。また、永住権を取得した人々の中には公務員になるなど、ごく一部の場合を除き、ほとんどの場面で日本人と同等の扱いを受けることができるとされている。

一方、前述した技能実習生の扱いについての判断は、より難しいものとなる。彼らは今や日本の産業において欠かせない存在である。彼らなしでは手が回らない工場や、介護施設も存在すると聞く。その反面、グローバル化が進んだ今でも、外国出身というだけで冷ややかな目を向ける人たちがいるのも事実である。しかし、それだけの理由で日本の産業に貢献してくれている彼らを厳しい扱いのもとにさらすべきなのだろうか。技能実習生は永住権はもちろん、日本国籍を持っているわけではないし、実習期間終了後には自分の国に帰る人も多く、日本人や永住権を持つ人々と同等の扱いをすべきとまでは言えない。しかし、国籍は違えど同じ人間として、日本に住んでいる限り日本人と同じ扱いをし、実習生の人権を守る取組をすることが必要だと考える。

私は日本語教師のボランティアを通して、多くの技能実習生と関わってきたが、仕事に対しても日本語学習に対しても一生懸命で、日本の風習や季節の行事を楽しんでくれる人ばかりである。これからの社会が彼らに対してどんどん厳しくなっていくという恐れを強く感じている。そこで、実際の社会が多くの外国人を受け入れた場合にどうなるのかという疑問がわき、過去に、今の日本のように多くの外国人を受け入れていた他の国は、今はどうな

っているのか調べてみた。ここで２つの国の例を紹介する。

一つ目はドイツの事例である。ドイツでは第二次世界大戦後、人道的、経済的な理由で多くの移民・難民を受け入れてきた。しかし、主に労働力として受け入れた人々の文化的・歴史的背景への理解不足等により、人種や宗教的な理由から犯罪が増加した。また、政治家と国民の意見の食い違いにより、反移民・反難民の極右勢力が支持を拡大する結果となってしまった。今年５月に発足した新政権を中心に今も対応が模索され、国内でも意見が割れ続けているようである。

二つ目は、スウェーデンの事例である。スウェーデンは移民に寛容な国として知られており、国民の約２割が移民である。しかし、近年では移民の社会的孤立や犯罪率の増加が話題になっている。また、スウェーデンは社会福祉がたいへん充実しているが、それが逆に移民の自立を妨げているともいわれている。これらの問題により国民からの不満の声も増え、近年では母国への帰国を決めた移民に約５００万円を給付するとして帰国を促している。

これらの例から分かるように、無計画な外国人の受け入れは、これまで築いてきた国家の雰囲気や政治のバランスを崩してしまう可能性がある。しかし、技能実習生がいる労働などが当たり前となっている昨今、すべての外国人を排除することなど不可能であり、日本人も外国人も関係なく社会全体で協力していくべきだと考える。そして、それが国際協調へとつながっていくはずだ。

国際協調という言葉を調べると、「一国の利害だけでなく、国際的な観点から政策を運営していく考え方」という定義が出てくる。私は、「技能実習生」という制度はまさにこの理念に則っていると考える。実際に JITCO（公益財団法人　国際人材協力機構）の定義によると、「技能実習制度の目的・趣旨は、我が国で培われた技能、技術又は知識の開発途上地域等への移転を図り、当該開発途上地域等の経済発展を担う『人づくり』に寄与するという、国際協力の推進です。」と書かれている。つまり、技能実習生として日本に住む外国人を受け入れ、日本人と同等の水準で暮らせる程の待遇を提供し、彼らが自国に帰った時に自国の産業に貢献し、世界全体の発展につながる技術を身に付けられるようにするのが、産業先進国として日本が国際社会の中で果たすべき役割であると私は思う。

もちろん何から何まで生活環境を整えてしまっては、スウェーデンがそうであったように、国民に反感を抱かせるような事態になりかねない。しかし、外国人だからといって厳しい状況下での生活を強いたり、文化の違いを理解しようとしなかったりすることもまた、お互いへの無知や不信感によってより距離を遠ざけることにつながってしまう。一部の外国人の素行の悪さにより、特定の人種や外国人全体に嫌悪感を持つ人がいるのは仕方のないことである。しかし、私は日本語教師のボランティアを通して、どの国にもよい人、日本のことを想ってくれている人がいることを学んだ。実際の外国人の個々の姿を見ることで、「外国人」という大きな枠組みではなく、形の違う様々な異文化を受け入れ、国際協調につながると私は信じている。これからも多様な背景をもつ人と関わり、互いに個人として理解し合える関係を築くことで、偏見や差別のない、すべての人が個人として関わり合える社会へと繋げていきたい。

参考文献

○　人口減少を口実にした移民導入の失敗例とその教訓とは
https://20231221070546601063 7.onamaeweb.jp/?p=1063

○　みずほ総合研究所　急増するドイツでの難民申請
https://www.mizuho-rt.co.jp/publication/mhri/research/pdf/insight/eu151007.pdf

○　JITCO（公益財団法人　国際人材協力機構）サイト
外国人技能実習制度とは　https://www.jitco.or.jp/ja/regulation

○　コトバンク　国際協調

○　8 SIDOR　Nyheter pålätt svenska　Många är ledsna
https://8sidor.se/sverige/2025/02/manga-ar-ledsna/

○　8 SIDOR　Nyheter pålätt Svenska　Fler flyktingar åker hem
https://8sidor.se/sverige/2016/05/fler-flyktingar-aker-hem/